

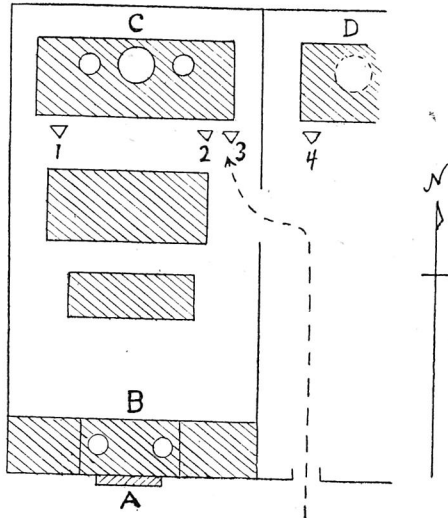
山西平遙縣城調查手記

○平遙縣城

十六日午後一時の汽車に乗つて平遙に向はむとす。一番列車來らず。少し待つ中に、二番列車より稍々早目に一列車入り來る。投じて一時半頃、平遙に着す。○○に行き平遙旅館を與へらる。宣撫班を訪ねて事情を聴取するも詳かなる事を知らず。自ら集福寺に行く。

集福寺

縣志に據れば『西門内。唐時哲法師住此』と言ふ。見上ぐれば『女子實驗初級小學校』と記す。併し尙ほ上部には『集福寺』と稱する額が懸つてゐる。煉瓦を以て門を閉じ上げてしまつて東方の小門より廻り入らねばならぬ。奥の大雄寶殿には大きな三尊佛が安置され、中央は合掌し左右は印を結ぶ。碑文は四個あり、その位置は次の如し。



A、『集福寺』額。
B、天王像。

諏訪義讓

C、三尊佛。

D、佛座殘存。

1、『五道廟尼僧理福施銀三百兩云々 光緒二十七年

四月』碑銘。

2、重修集福寺碑記『本邑西城內舊有集福寺。俗稱西寺。不知創自何時。惟見明石上有宣和四年趙遇妻施

門石一雙云々 光緒三十二年』。

3、『大明嘉靖二十六年歲次丁巳五月二十二日重修水陸正殿本坊云々』碑銘。

4、『旨大清乾隆十六年歲次辛未、本監現住僧會司諱寬奇字異如。梅柏樹四株。梁村積福寺眷弟寬化敬判』

碑銘。

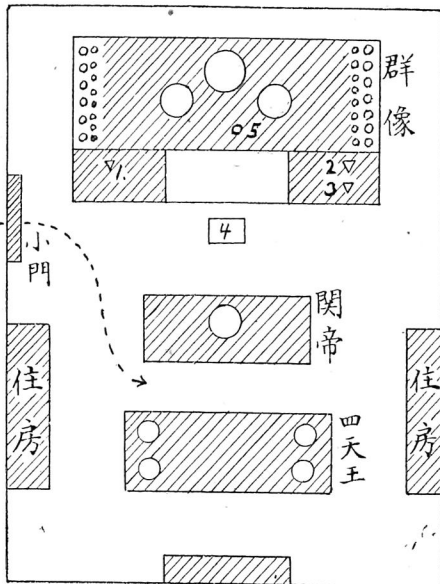
第二の碑文に依つて集福寺が俗稱西寺なる事を知る。

併し何時の創建であるか明確でない。縣志に見ゆる『哲法師』とは『宋高僧傳卷四』に出づる『西河平遙人、宗哲』に相違ない。彼れは玄奘の門下であり太原の崇福寺に移り住んだと傳ふ。此の集福寺と何等かの關係あつたやうに想像される。

吉祥寺

吉祥寺街にあつて吉祥澡堂の北側に位す

正面の大門を開かず。西方の小門より入る。丈六の三佛、坐す。その左右の兩壁に上下二段より成る鐵製の佛像、大小、凡そ百體あり。交城縣石壁の玄忠寺にありと稱する鐵佛の群像も斯くの如きかと想像す。境内の見取圖を製す。住むに家なく寺に來つて巢を構ふ支那人、物珍ら



しく眺め入る。

- 1、重修平瀨吉祥寺碑記『……寺建於元。明洪武嘉靖時整修……』光緒乙卯年立。
- 2、重修吉祥寺碑記『……在縣城之中縣治之左。肇自大朝延祐四年邑人五路總管梁公天翔建。而爲家佛堂也。』大明嘉靖五年立。

3、梁氏義井碑記。萬曆三十八年立。

4、成化二十三年製鐵大香爐。

5、萬曆十五年製大輪。

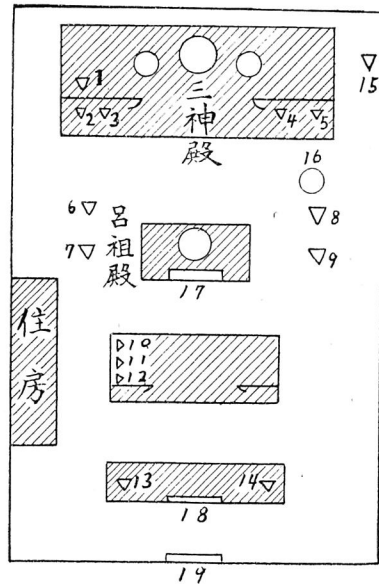
察するに元の延祐年間の初建で明の洪武嘉靖に改修され更らに近代光緒年間に重修されたものであらう。梁公天翔は萬戸公に封ぜられ新元史卷一四八に列傳出づ。

清虚觀

平遙に來つて最も期待をかくるは清虚觀である。十七日の朝、汾陽に出發する前の時間を利用して一瞥す。果して碑碣多し。左の圖示に依つて知り得る。

- 1、新蒙古文字碑。元、鷄年元年立。
- 2、重修清虚觀碑。康熙四十二年立。

- 3、補修清虚觀碑。光緒二十四年立。
- 4、補修清虚觀碑。光緒二十四年立。
- 5、重修清虚觀碑。康熙二十四年立。
- 6、文字不明。至元六年立?。
- 7、重修太平興國觀碑記。萬曆四十二年立。
- 8、文字不明。裏面に『能仁普云々』の文字あり。
- 9、元府萬戸梁瑛施碑。大元歲次壬寅立。
- 10、重修太平興國觀題名記。萬曆三十七年立。
- 11、表面不明。裏面、葬枯骨碣記。皇統壬寅立。



12、表裏不明。

13、巴侯陳公去思碑。萬曆三十七年立。

14、逢侯陝西費老父母志思碑記。崇禎六年立。

15、募修清虛觀碑記。康熙辛未年立。

16、正德十三年大鐘。

17、『純陽宮』額。

18、『太平興國觀』額。

19、『清虛仙跡』額。

元代、八思巴の製した新蒙古文字の碑文に接したのは是れが始めである。實物の碑面に向つた時は流石に心躍つた。裏面に漢譯を書す。元の萬戶梁瑛の傳は新元史卷一四八にあり。面白きは『葬枯骨碣記』で金代、戦後に枯骨を拾ふ様子を述ぶ。事變中として思ひ合はず點多し。恐らく最も古きは第十二號碑か。不幸にして全面磨滅し讀むに堪えない。第七萬曆重修碑に言ふ『按太平興國觀。

肇自有唐。垂拱三年丁亥歲朝參大夫平陶令護軍河東裴公諱常創勅云々』と。縣志に『唐顯慶二年建』と稱する説と何づれが是なるやを知らず。

大殿の神像は何時の重修か。印を結び、後背を負ひ様式全く佛像に似る。また民間信仰の實狀を窺ひ得るであらう。

十一時の汽車を求めて驛に向ふ。容易に出でず。聞けば太原より來る一番列車を待つて發車すと。正午少し過ぎた頃に漸く汾陽に向ふ。同蒲線の支線で離石方面に行くには是れを利用するを便とす。

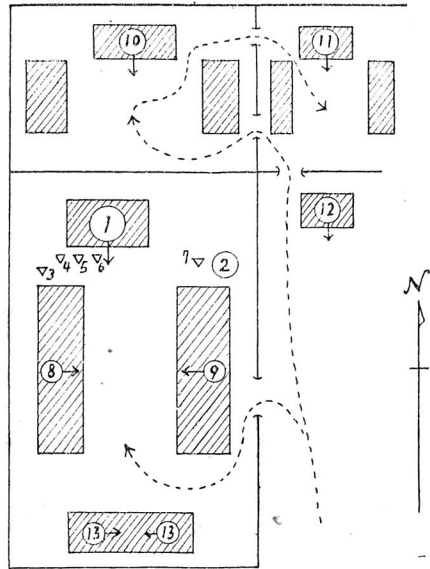
○汾陽縣城

九月十七日午後一時四十分、汾陽驛に着す。古來より有名な汾州の地なれば大いなる希望を持つ。直ちに〇〇に行つて支部長に挨拶し調査の便宜を請ふ。出で、縣公署及び宣撫班に至り色々問ひ合はす。城門外は多少、不安なりとて東關南關西關の調査には支那の巡警を附すべしと申出でらる。明日十時宣撫班にて落合ふ事として城内、大雲寺を訪づる。

大雲寺

寺に住僧なく草木茂つて荒涼たること限なし。壞れかけたる堂宇を覗き碑文を尋ぬるに、大體、次の如し。

- 1、銅佛大座像。
- 2、大明天順元年大鐘。
- 3、道光二十九年重修碑。
- 4、不 明。
- 5、雍正六年重修碑。
- 6、大雲寺勸建照辟碑。康熙己寅立。
- 7、新建大雲寺碑記。年代不明。
- 8、觀音正坐像。左右二十五菩薩。



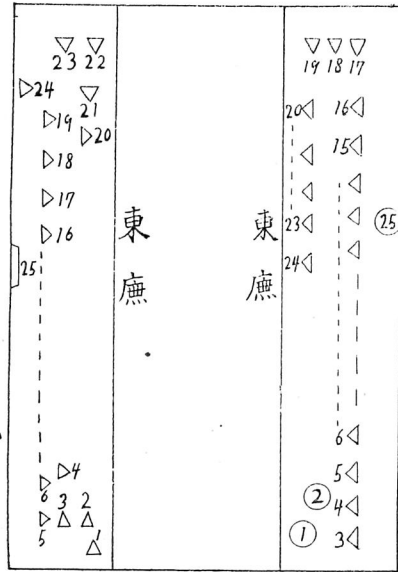
- 9、觀音跪坐像。左右二十五菩薩。
- 10、觀音像。泥質、五尺餘、明代の逸品か。
- 11、彌勒像。粗惡にして前者と同作と見えす。
- 12、觀音像。製作頗る劣悪。
- 13、天王像一對。

銅佛大坐像は本寺の本佛と考へらる。明かに彌陀なり。第五號碑に據れば『郡城西南隅大雲寺。本淨土寺遺趾也。寺在前明爲納子習禪之所。至崇禎中流寇肆毒。遭焚燬云々』と出で、掌つて淨土寺と稱し明末兵戰の爲めに焚かれた事を知り得る。當時『丈六の金身竝立す』と傳ふるが、今また寺内の一隅に僅か雨露を凌ぐ程度の小屋に納まつてゐるのは、海初重建の堂宇もその後再び失はれた結果であると推定する。兎も角、驚くほど立派な大銅佛である事は注目に價する。

孔子廟

汾陽公園に入る手前より左に入つて今、修繕中の孔子廟を見る、櫺星門は開かないやうになつてゐるが太原の文廟より遙かに壮大である。事變前、西廡は小學校、東廡は圖書館となつてゐた。圖書館には遺物

古籍多かりし由。今は一物も残さぬ。大成殿は規模宏大にして孔子の神像を祠る。是れ太原の位牌のみ存するのと異なる。禮樂の諸具はその邊りに見當らず。碑文のみ目に着く。



- 東廡
- 1、大寶幢 大定十九年立。
- 2、尊勝大寶幢 景龍三年立。
- 3、重修汾州府學記 乾隆四十二年立。

- 4、重修畢宿廟記 大明正德元年立。
- 5、汾州西河縣畢宿廟記 泰和元年立。
- 6、重修學宮認立………不明。
- 7、重修汾州府宮碑記 雍正四年立。
- 8、助修學宮碑記 康熙二十五年立。
- 9、卜山書院記 康熙甲辰立。
- 10、創置汾州學田記 隆慶元年立。
- 11、御製正孔子祀典中記 嘉靖九年立。
- 12、汾州府孔子廟碑 康熙丙午立。
- 13、『帝遣』大字碑 嘉靖乙丑立？
- 14、15、16、『帝遣』續碑 同。
- 17、萬曆癸卯之詩碑 年次不明。
- 18、郡守太原王璿之文碑 同。
- 19、『我結草』碑 同。
- 20、新建汾州府儒學碑記 康熙二年立。
- 21、大魏武定七年四月八日造佛碑。
- 22、大齊太寧二年二月八日造佛碑。
- 23、小寶幢 年次不明。

- 24、大佛頂寶幢 同。
- 25、中寶幢斷片 同。
- 西廡
- 1、半切書刻碑 年次不明。
- 2、口口口口十王堂碑。 至元二十八年立。
- 3、汾州別立大守磨崖碑文記 嘉祐五年立。
- 4、御賜口序 年次不明。
- 5、重修汾州府學碑記。 崇禎十一年立。
- 6、重修汾州府學碑記。 崇禎三年立。
- 7、增修學宮禮器具碑記 康熙四十年立。
- 8、重建林宗祠記 洪武七年立。
- 9、『見道吟』碑 年次不明。
- 10、漢郭有道先生碑銘并序 金代再刻。
- 11、重修汾州府文廟碑。 先緒十八年立。
- 12、同 題名碑。 同。
- 13、文廟碑記 道光十三年立。
- 14、汾州府新修儒學記 正德九年立。
- 15、汾州府新修儒學題名記 萬曆十三年立。

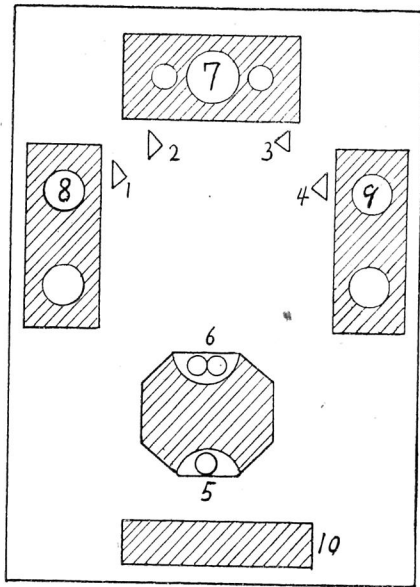
山西(平遙、汾陽)縣城調查手記

- 16、汾州新濬諸泉圖記 萬曆二十年立。
 - 17、聖旨碑 嘉靖九年立。
 - 18、汾州府重修文廟記 順治二年立。
 - 19、新建汾州府儒學碑記 康熙元年立。
 - 20、祖師碑記 至元十六年立。
 - 21、御製武襄公祭文碑 熙寧元年立。
 - 22、天命記 大德口年立。
 - 23、禮部題名記 順治九年立。
 - 24、北齋佛塔碑 年次不明。
 - 25、汾州圖書館蒐碑記 民國十二年立。
- 以上、古之は東魏北齊より金元時代を含みて近代に及ぶ。最後の蒐碑記は民國十二年、縣長王君の力に依り是等の碑碣を集めたる始末を述ぶ。王君には『汾陽金石記』なる書がある。并せて研究に資すべきである。
- 縣公署圖書** 縣公署の西屋に城内の寺院及び民家より事變に際して蒐集したる書物を藏す。上段は佛典、下段は外典。宋元版は更らに見當らず。正史通鑑圖書集成雍正上諭寺あるも多くは端本、採るべきものなし。

天寧寺

宣撫班員巡警等と東關に行く。北面すれば七級の大塔が聳ゆ。寺額『天寧寺』を掲ぐ。塔基の南面に一丈許りの彌陀の立像を安ず。製作は優秀なるもの宋代か。

縣志に據れば『相傳郭林宗故宅。唐建。天中寺。宋改名太子院……明洪武十四年加修建。更名天寧寺』と言ふ。山西通志には更らに『寺中釋了覺建塔尙存』と記す。現存の遺構は恐らく明代のものであろう。探るべき古碑舊傳なきを遺憾とする。



- 1、重修天寧寺西佛殿三聖殿碑記。乾隆三十七年立。
- 2、重修天寧寺大雄寶殿碑記。順治五年立。
- 3、嘉慶重修碑。
- 4、重修天寧寺東佛殿碑記。嘉慶二年立。
- 5、彌陀立像。
- 6、連座兩像。
- 7、坐佛彌陀三尊。
- 8、9、坐佛採色像。
- 10、天王殿(物置となる)。

河汾圖書館

河汾聯合中學校に附屬して設けられたものである。今は○○病院となる。比較的散佚少し。九通東華錄十三經註皇清解經圖書集成天下利病書等あり整理すれば完本と爲し得ると思ふ。

資福寺

南關にあり。西側、路南に『藥王庵』の額を掲ぐ。それより入れば壞れたる四天王の前に古碑二つあり資福寺の趾なる事を明にする。

- (一)資福寺重修記 乾隆五十九年立。
- (二)資福寺重修記 嘉靖三年立。

後者に曰く『荆建于大周開荒二年。重修於國朝嘉靖元年云々』と。前者また同じく是れを承く。大周に開荒の年號なく更らに開荒は支那歷朝になし。隋の開皇二年を意味せるものであらう。縣志には『隋開皇二年建』と稱す。中國人の傳説に對して無批判なるを一驚すべきである。

藥王庵の佛像は全く道教化してゐる。茲にも中國人の實際信仰を窺ひ得る。

慶雲寺

西關の西端に位す。碑文は(一)光緒(二)嘉慶(三)乾隆(四)雍正の四つあれど寺の由來を知るに足るものなし。

此の寺に就いて注意すべきは本尊の臺座に千佛を列ね以て連辨の代りと爲してゐる事である。是れは極めて希なる形式である。かくの如く明瞭なる佛像の前にさへ、中國人は『行雨龍王老翁之神位』と言ふ標牌を出す。更らに右に聖母廟、左に呂祖廟を設く。是れが中國の民心を満たすべき寺院構成である。

報恩寺

『報恩寺』と記す正門よりは入るを得な

い。東側の關帝廟より廻つて調査す。天王殿の前に碑文が四面ある。何づれも清朝以來のもので創建に關しては『其源流備載舊碣。茲不贅。』等と稱し何等知るに由がない。大雄寶殿の三佛は大體、天寧寺のと同時代のものと推定した。城内の中央にあつてもよく佛教寺院として形式を残す。今は正面を閉じ門前に露天店が並んで物賣りの聲が高い。

東嶽廟

孔子廟の前方に、それと直ちに解る如き廟宇である。相當に宏壯なのを見れば近代まで如何に信仰されたか知られる。碑文の數も多い。が是れとて採り出すべきものなし。殿前に二丈に餘る鐵の大香爐がある。明の正徳三年の製作。寫眞を撮つて僅かに喝を醫す。

汾陽は尙ほ調査するに時間をもつてすれば得るところあるかも知れぬ。日本の學者は未だ這入つて居らぬ。圓仁は開成五年(840A.D.)これを通過した。曇鸞とも何か關係があるやうでならぬ。兎も角、冷やかな理論の宗教でなく熱烈なる實際的信仰を要求する傾向のある土地で

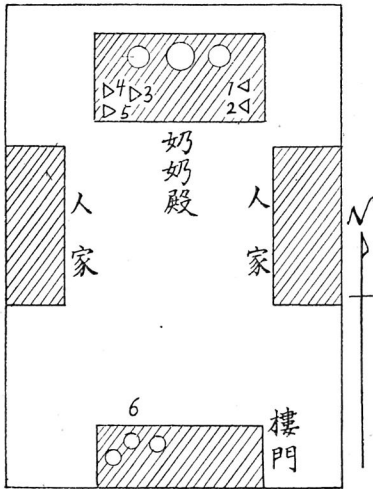
あるとの印象を残して歸り來つた。

○續平遙縣城

十九日午後、汾陽より平遙に歸つて宣撫班に立寄り碑文の拓本を爲すものを探し求めてもらふ事とした。直ちに興國寺の調査に急ぐ。

興國寺

城内の大通りを南に進めば『興國寺』の寺額の下に出る。併し入つて見れば佛像はなく『奶々』が安置してある。僅かに樓門の上に佛像三體が名残りを留む。



1、重修興國寺碑記

道光五年立。

2、重建本城興國寺碑記 乾隆七年立。

3、重修南門洞關帝廟並興國寺碑記 光緒九年立。

4、全題名碑記 光緒九年立。

5、重修寺廟碑記 乾隆四十七年立。

6、三尊佛(頭部なし)。

碑文五面ある中、第二號重建碑によれば『其始建於口口口口祐五年。重修於元泰定年』と見えて既に元の泰定年間に重修されてゐた事がわかる。第三號重修碑には關帝廟云々と出づる。今現に奶々殿の二階に關帝が安置されてゐる。勿論この寺の住僧なく普通城民が入り來つて住居を爲し盛んに鐵屑を拾ひ集めてゐた。

孔子廟

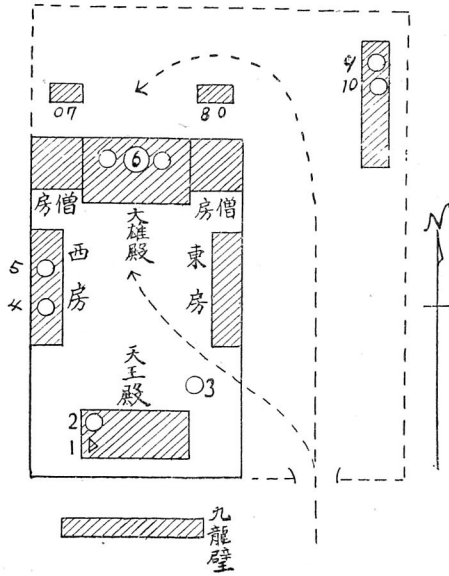
樞星門は固く鎖す。西南の小口より入る。

事變前は小學校ありし如し。大成殿には神像も位牌もなし。碑石は十五もあるが、最古のものが明の嘉靖くらひで記すに足らぬ。後方に續いて圖書館及び禮壇の跡がある。小學校で用ひたものであらう。

太子寺

縣志に『佛寺也。以佛爲梵王太子故名』と

説明す。孔子廟の北方にあり。前に九龍壁を建つ。想ふ



に大同のそれに勝るとも決して劣らない逸品である。正門は同じく入るを得ず、東側の便門より通ず。『平遙佛教會所』と『附設淨行念佛堂』と言ふ二枚の標札を出す。此の日、住持はゐなかつた。が平遙で佛教活動を爲す唯一の寺院で日華親善にも相當に貢獻してゐる由。寺僧の語るところに従へば今の寺院は昔の境内の三分の一に當ると。導かるゝまゝに後方に廻れば廣場がある。

火災の爲めに烏有に歸した様だ。佛像が小さい軒下に置かれてゐるのも哀れを催ふす。

1、如意沙門碑 唐熙四十二年立。

2、銅製、佛頭。

3、嘉慶二十四年製中鐘。

4、開山塑像。

5、釋迦塑像。

6、彌陀三尊塑像。

7、俗服銅像。

8、毘盧梅那銅像。

9、鐵製丈六坐像。

10、銅製、佛頭。

大雄殿の彌陀觀音勢至の三尊で念佛宗たる事を知る。裏の西屋の七號像は袈裟、衣の姿でない。官服の様だ。寺僧に聞けば是れが太子で、太子寺の名は是れより出づと言ふ。悲しい事に頭部がないから何とも判然しない。第八及び第九號の兩像は完全なものである。殊に九號像の背部には『嘉靖十一年二月二十日造』と陽刻され明確な

304

る年代を察し得る。併し第十及び第二號の佛頭は胴體を有せぬ。何づれも等しく明代の遺品と認めてよい。

東濟廟

東門外にあり。單獨に城門を出づるのは心配であるが決意して行つた。前に惠濟橋と言ふのがあ
る。此の廟は一名弘濟道院とも稱せらるゝ如く道教の寺院である。今は道士は一人もゐない。農夫の棲家となつて秋の取入れに忙しい。碑文も十二個程あつた。が康熙時代のものが最初で特別に重要なものなく又道院の初建を推定し得る記載もなかつた。明末の創建か。

九月二十日午前までの調査が叙上の如きものである。午後は拓本を清虚觀で摺らせた。天氣晴快でなく加ふるに技術が劣つてゐるので四枚しか打てなかつた。元代の八思巴文字の碑文は更らに一枚ほしかつたが雨降り來り意を遂げなかつた。翌日は等の榻工を連れて汾陽に行き文廟の六朝碑等を摺らせる考へであつたが當日になつてみると雨降り頻り、思ひ止めて太原に歸つた。是れで豫定の南部調査を一應終へた。

……需めらるゝまゝに昭和十三年度手記を遽かに取

り出す……